



Title	堀田善衛『歴史』：中国の内戦を描く
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 155, 35 (右) -65 (右)
Issue Date	2018-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.155.r35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71279
Type	departmental bulletin paper
File Information	155_05_mizutamari.pdf



堀田善衛『歴史』

——中国の内戦を描く

水 溜 真由美

一 はじめに

堀田善衛『歴史』（新潮社、一九五三年）は、一九四六年秋の上海を舞台として、内戦に突入しつつあった時期の中国の状況を国民政府に留用された日本人インテリの視点から描いた長編小説である。^① 県立神奈川近代文学館・堀田善衛文庫に所蔵されている講演原稿「日本の知識份子」^②には、『歴史』執筆の背景が次のように記されている。

私は、一九四五年の三月、すなわち中日両国の人民が苦しみのどん底にあったときに、日本からこの上海に来ました。（略）そして、日本にとっては敗戦であり、中国にとっては勝利であった一九四五年八月十五日をこの上

堀田善衛『歴史』

海で迎え、戦後の、国民党下における強烈なインフレーションと米国物資による中国経済の破壊を眼前に見、そして一九四六年の十一月末から十二月にかけて、上海の市民の多数が立ち上って戦後の苦しい生活からの解放を求め、暴動を起した、その勇敢な闘争をも、私の眼で見て知っているのであります。そのときのことを、「歴史」という小説に書いたこともあります。

堀田は一九四五年三月末から四六年末まで上海に滞在し、帰国後、その体験を元にして「上海もの」と呼ばれる一連の小説を執筆した。主な作品として、「歯車」(『文学』51 一九五一年五月号)、「漢奸」(『文学界』一九五一年九月号)、「断層」(『改造』一九五二年二月号)、「祖国喪失」⁽³⁾、そして『歴史』⁽⁴⁾がある。

このうち『歴史』は、内容的にも、分量的にも、また発表時期から言っても、「上海もの」の集大成であり、他の四つの作品よりもはるかにスケールの大きな作品である。先述の引用からもうかがえるように、堀田は『歴史』において、一九四六年当時の中国の経済的な混乱の根底に階級間の対立を認め、数年後の共産主義革命の成就を念頭におきながら、胎動しつつあった変革の動きに深いシンパシーを寄せている。つまり、『歴史』は、内戦期の中国社会の動向をマルクス主義的な観点から捉えた作品として読むことができる。⁽⁴⁾

こうした点において、『歴史』は「上海もの」に限らず堀田の小説全体の中で特異な位置を占める。というのも、堀田の小説のほとんどは、非人間的な政治のあり方を鋭く批判する視座に立ちつつも、アウトサイダー的な立場にある——したがって無力な——インテリに定位して書かれているからである。もちろん、堀田の分身である日本人インテリ竜田が視点人物的な立場で登場する『歴史』にも、他の作品と同様の構図が存在する。けれども、『歴史』の竜田は

社会変革に身を投じる人々に率直なシンパシーを示し、政治に対する自分なりのコミットメントを模索する。ある意味で、『歴史』は堀田らしくない作品とも言える⁽⁵⁾。おそらく堀田はそのことを自覚していたのであろう、「私の創作体験」の中で、「無理していることが十分この『歴史』の中にあるだろうと思うのです」と述べている（第一三卷一三三頁）。にもかかわらず、堀田にとつて『歴史』は、約一年九ヶ月間の中国体験の総括として、また「上海もの」の締めくくりとして、書かれなければならない作品だった。「私の創作体験」によれば、堀田にとつて中国滞在は、「芸術至上主義的な考え」を打破し、日本と中国との間にある「宿命的な関係」を直視する契機となった。そして、「上海もの」と言われる一連の小説の中で堀田が描き出そうとした最大のテーマも、日本と中国の「宿命的な関係」だった。

そんなことがあつて昭和二十二年、日本に帰つてきまして、まず書き始めた小説を全部まとめたものが『祖国喪失』という題名の、長編小説にはなつていませんけれども一連の連作小説、そういうものを昭和二十四年ごろからはつぽつ発表しました。中国に材料を取ったもの。つまり、そこでいろいろな問題にぶつかった中でも一番大きな問題というのは、やっぱり日本と中国、中国と日本、そういう宿命的な関係です（第一三卷一三〇頁）。

それにしても、『歴史』の場合、なぜ中国の内戦を階級対立の観点から描くことが日本と中国の「宿命的な関係」を問題化することにつながるのだろうか。本稿では、『歴史』を枠づける階級間の対立構図を明らかにしつつ、日本人登場人物の左林、竜田、亮子の存在にも注意を払い、堀田が内戦期の中国社会あるいは国際社会をどのように捉え、また日本と中国の関係についてどのような態度表明を行っているのかを明らかにしたい。

二 支配階級の人々

『歴史』は一九四六年秋の上海を舞台とする作品であるが、力点がおかれるのは、上海の経済的な混乱と、暴利を貪る者と困窮を強いられる者との間にある対立構造である。登場人物も、日本人の竜田と亮子をのぞけば、ほぼ二つのグループに分類することができる。このうち前者の立場にあるのは、左林（日本人）、康正（中国人）、羅紹良（中国人）、李安耀（中国人）、リュシエンヌ夫人（フランス人）、ラムステッド（アメリカ人）の六名である。まずはこの六名の顔ぶれを簡単に見ておきたい。

左林は、戦時中、陸軍の特務機関と一体化した××通商で中古の武器や阿片の取引を行い、また対重慶和平工作に名を借りた対敵貿易に従事していた。現在の左林は、名目上竜田と同じ国民政府の資源調査委員会に留用されているが、実際には、国民政府の承認の下で、かつての特務機関のネットワークを利用しながらA A E C（亜美経済会議）を主宰している。左林はA A E Cを拠点として、中日米間の密貿易、希少金属の産地である海南島の開発、日本軍の遺留財産の移転・運用などに携わっている。

康正は、山西省出身の大富豪であり、上海のバンドの裏に六階建てのビルを持つ金福貿易公司（貿易商）を経営している。康正は「外国商社が中国の内陸に対して商品売り込むに際して仲立ちの仕事をする、所謂買辦商人^{コンブランドル}」（第二卷二七頁）であり、左林は戦中からの取引相手である。

羅紹良（少将）は、重慶に住む知日派の軍政部高官であり、戦時中左林の取引相手として対敵貿易に関与していた。

一九四六年五月の国民政府の南京遷都後は、「奥地の政治経済軍事一切の実権を握る重慶行營に於て高い地位」(第二卷一一九頁)を占める。羅は左林と共謀する一方で、次に述べる李安耀と結託してA A E Cの資産を狙っている。

李安耀は、資源調査委員会の主任で竜田の上司である。李は第一次大戦後フランスに留学してパリ大学で政治学を学び、同窓のリュシエンヌ夫人と結婚した。

ラムステッドは、ニューヨークに拠点をおく経済調査専門の会社の社員であり、海外投資の有効性、安全性を調査する仕事に従事している。高給取りのビジネスマンであり、外国資本の手先というべき人物である。

これらの六名は共謀関係にある。物語のヤマ場において、国際飯店のラムステッドの部屋で開催されるこのグループの会議は、次節で取り上げるもう一方のグループの動きと対位的に描かれる。

このグループに関して特に目をひく点は国籍の多様性である。彼らのポジションは、特務工作員(左林)、軍人(羅紹良)、買弁商人(康正)、官僚(李安耀)、外国資本(ラムステッド)として捉えることができるが、国籍の異なる彼らが共謀して暴利を貪る構造は、支配層にとって資本蓄積の欲望がナショナリズムの論理に優越することを物語る。しかも、左林、康正、羅紹良の結びつきが戦中に遡るように、またA A E Cが戦中の日本軍特務のネットワークを基盤としているように、そして外資が一貫して後発国である中国を食い物にしてきたように、支配層の共謀関係において戦中と戦後は連続している。

作中では、竜田の視点を通じて、戦火を交える敵国と裏取引し私腹を肥やすことの破廉恥さが繰り返し指摘されるが、それは日中間に限ったことではないとも示唆される。ラムステッドは、第二次大戦中のアメリカのS D石油会社とドイツのイー・ゲー・ファルペンの協力関係を念頭におきながら、竜田に対して、「戦争というものには、一種の

osmotic な作用がある」(第二巻第七三頁)、「階級間、及び宗教上のそれではなく、資本主義国家間の同一平面上に於ける戦争では、当の敵は必ずいつか協力者になるものだ。これが僕の云う歴史の osmotic な作用だ」(同)と私見を述べる。^⑦

他方、戦後の経済的な混乱のただ中で、外国資本と結びついた商業資本、投機的資本が至る所で政治権力と結託しながら一般市民を食い物にする状況が描かれる。^⑧ 何よりもそれは密輸、投機の横行と、その結果としてのインフレの進行として表れる。終戦直後の中国では、戦争によるダメージと産業基盤の未熟さゆえに、米、石炭、綿花、化粧品、粉ミルクなどのありとあらゆる商品が密輸され、投機の対象とされる。左林は、これらの商品に加えて旧日本軍の阿片や武器をも密売し、また中国経由で米国から日本にサッカリン、ライターの石、葉などを密輸している。左林は密輸ルートを確保すべく、リュシエンヌ夫人の名義を借りて、全中国の国内航空路線を独占する見込みの航空会社に多額の投資を行い、航路の日本への延伸も画策している。

他方で、国民政府は敗戦国である日本やドイツの工場を接收した上で横領・私物化し、設備、原料、在庫品などを転売あるいは投機の対象にしている。買弁商人の康正はドイツの薬品会社バイエルの上海工場の接收に携わり、在庫品の日本への密輸を企てている。後述するように、『歴史』には、権力者の私利私欲と結びついた工場の接收に対抗する労働者の闘いも描かれる。

さらに、アメリカの余剰物資のはけ口でもあったアンラ(国連戦災地救済機関、UNRRA)^⑨の救援物資が闇に流れて投機の対象となり、中国の民族産業を破壊していることにも目が向けられる。作品の冒頭では、竜田が夜中にガーデン・ブリッジの検問所の付近で目にした光景が映画のワンシーンのように活写される。疾走するトラックが兵隊に

よる銃撃を受けながら走り去った後、路上には、トラックから撃ち落とされた一人の男の屍と四つのセメント樽が残される。割れたセメント樽からは米国製粉ミルクがこぼれて広がり、それをめがけて裸足の「流氓」が群れをなして押し寄せる。この粉ミルクはアンラの救援物資であり、密輸団が倉庫破りの盗賊によって運搬される途中だったと説明される。

他方で、中国の共産主義化の可能性を見据えた動きも描かれる。すでに中国各地では人々の国外への逃亡と資産・資本の移転が開始されている。先に挙げた六者も例外ではなく、左林、李、リュシエンヌ夫人、羅は日本への引き揚げ・移住を検討し、ラムステッドはアメリカに去る。こうした動きは東アジアにおける冷戦秩序の構築と密接に連動している。ラムステッドは本国あての報告書の中で、「在上海の政府資本、民間資本、製造工業者等の日本への急速な移動希望」をふまえつつ、「中国より見た日本」が「次第に崩壊に近づく中国共産党に対する闘いの有力なる後方陣地としてのそれに変化しつつある」と分析する（第二巻二〇五頁）。左林は、中国が共産主義化すれば「蔣さんのところへ行く筈のアメリカの金と物の大部分が日本へ入ることになる」（第二巻一六八頁）ことを見込み、日本にいる「別の特務機関の長」Rと連携しつつ政治工作を進めている。北一輝の向こうを張り戦後版「日本改造法案」を執筆する左林は、「極東の兵器工場として反共立国」（第二巻二六三頁）を「日本再建要項」の第一項に掲げる。

これまで見てきたように、堀田は『歴史』において中日米の権力の裏面を暴くことに力を入れているが、特に印象的なのは左林と羅にまつわる特務機関の闇を描いていることであろう。堀田は他の作品でもたびたび特務工作員やスパイを登場させており、「上海もの」の中では、「鹵車」において国民党の特務機関の手段を選ばぬ残忍さを描いている。

特務機関に対する堀田の強い関心は、国民党の宣伝部に徴用された時代の体験に由来する。『上海にて』（筑摩書房、一九五九年）の冒頭に収録された「回想・特務機関」では、マラリアを患う同じ宿舍の住人のため、夜中に宣伝部の事務所に薬を取りに行った際の出来事が回想される。そこで堀田は、特務工作員の主要メンバーが勢揃いし、日本人から没収した所持品を「山とつみあげ」ていた異様な光景を目にする。因みに、この「特務機関」とは戴笠を長とする軍事委員会調査統計局（軍統）であり、「特務中の特務」、「テロ中のテロ」として人々から極度に怖れられていた。堀田は、座談会「戦後文学の国際的背景——堀田善衛を囲んで」（『文学的立場』第九号、一九四六年一一・一二月）においても、軍統をめぐる「恐怖感」について語っている。堀田は、軍統の幹部職員が皆武装していたこと、「日本が残していった財産というものの接收をめぐるものすごい暗闘、乱闘があった」ことを生々しく述懐している。

もちろん、『歴史』の中で重点的に描かれるのは、中国ではなく日本の特務機関についてである。敗戦前後に上海に滞在した堀田は、作中の「××通商」のモデルである昭和通商、Rのモデルである児玉誉士夫⁽¹⁰⁾、上海の宏済善堂を拠点として阿片の取引を行った里見機関⁽¹²⁾など、中国における日本軍の特務工作や謀略事件について様々な情報を耳にしていたことだろう。このうち日本の特務機関による阿片の取引については、南京大虐殺を素材とした『時間』のプロットにも用いられている。⁽¹³⁾

三 革命家たち

さて、『歴史』では、前節で述べた支配層のグループに対して若き革命家たちが対置される。主な人物は、康沢、周

雪章、史量才、洪希生、陶一亭、劉福昌の六名である。まずは、この六名の顔ぶれを見ておきたい。

康沢は、康正の息子でK大学亜東問題研究会のメンバーである。康沢は豪邸に住み、自家用車を乗り回し、石のコレクションとピアノの演奏を趣味とする大ブルジョワの生活を享受しながらも、革命思想に傾倒している。

周雪章は、K大学亜東問題研究会のメンバーで康沢の恋人である。仁々藥房の経営者の娘であり、階級的にはブルジョワである。

史量才もK大学亜東問題研究会のメンバーである。抗日戦争のため各地を流浪しながら八年間にわたる学生生活を続けることを余儀なくされ、すでに三十代である。史は、昆明において特務工作員の学生を密かに殺害した過去を持っている。

洪希生は、解放区に物資を融通することを目的としてアンラに勤務している。貿易商の子として天津に生まれ、抗日戦争により北京の大学を中退した過去を持つ。

陶一亭は、紡績工場の労働者である。大別山脈中の寒村に生まれたが、家内工業が衰退したため上海に出て日本資本の新亜紗廠に就職した。当局による工場の接収に対する抵抗運動を組織している。

劉福昌は、イギリス資本の上海電車会社の車掌で、戦中に竜田が住んでいた旧共同租界の住居の門番の息子である。戦時中、大別山脈で新四軍に技術顧問として参加する機会を持ったが、両親の身を案じて終戦直前に上海に戻り、上海電車会社に復職した。

右の六名は、唐沢邸に出入りする「仲間」、「同志」である。このうち洪希生や劉福昌は共産党の指導部と接触があることが示唆されるものの、グループ全体が党の影響下にあるわけではない。¹⁴⁾

注目すべきは、右の六名を革命を志向するグループとして同定しているのが竜田だという点である。『歴史』は、竜田が康沢邸で劉福昌を除く五名と交流した後、帰宅を急ぐ場面から始まる。その日の日中に、竜田は李主任に連れられてK大学の討論会に参加し、終了後に左派の学生につかまり康沢邸で食事を共にすることになった。当初竜田は、大ブルジョワの康沢を始めとして多様なバックグラウンドを持つ五名の「不調和さ」に違和感を抱くが、徐々に「中国の革命とは、こんな風な不調和な人々が相寄って進めてゆく何物かであること」を自然に受け容れるようになる（第二卷二六頁）。さらには、左林に関する情報提供を促す洪希生の話を聞きながら、「その不調和さがとりもおさず、広く深い（組織）というべきものの一環、或は氷山の頭なのかもしれぬということ」（第二卷五二―五三頁）に思い至り衝撃を受ける。

ところで、右の引用文中に「広く深い（組織）」とあるが、この言葉はすでに確立した組織のみではなく、将来革命の隊列に連なる人々をも含んでいるように思われる。『歴史』には、「流氓」と名指される無名の民衆たちの姿が印象的な仕方で描かれる。夜中のガーデン・ブリッジの上でこぼれた米国製粉ミルクに群がる「流氓」たちの多くは、現時点では革命思想を共有しているわけではなく付和雷同的でさえあるが、いずれ体制を転換する大きなエネルギーを秘めている。冒頭で引用した「日本の知識份子」の一節が示唆するように、『歴史』の後半では当局の露天商に対する弾圧をめぐる抵抗の動きが描かれるが、この動きは共產主義革命の成就に至る一里塚とみなし得る。

堀田は『創作ノート（3）』（県立神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵）の中で、『歴史』について、「この小説の主人公はAでもBでもない。AもBもCも圧倒し無意味にする群衆そのものである。しかし群衆そのものは、これまたA、B、Cから成る。しかもその全体はABCを越えたものである。しかもなほABCの努力は決して死にはしな

いこと」(二重丸、傍線、囲み線(原文は赤字)は堀田による)と書いている。『歴史』第三部では、「史量才は江湾への道を急いでいた。酔いどれのようによろよろしていた。熱があるようでもあった。眼には絶えず酷暑の夜、昆明で視察した男の顔と胸がちらついていた。彼はこの死者を、死者の影像を、もういちど殺したかった。けれどもそのためには、彼自身を殺さねばならない……。陶一亭は、冷たい大餅に冷たい油条をはさんでかじっていた。九時だ、たしか九時だと云つたな……。康沢と洪希生は再び街へ出掛けた。自動車のトランクにはビラがつめこんであつた。康沢の書齋には鍵がかけられ、なかでは学生が輪転謄写機をまわしていた。書齋のドアの前には白服の老ボーイが立番をしていた。竜田は左林の事務所に向かつて重い足をひきずっていた。亮子の身上話を聞いてもみたかったが、どうにも二人だけではいにくかった」(第二卷三三九頁)といった具合に、多数の登場人物の心理や行動が畳みかけるように語られるが、この文体はまさしく「群衆そのものを描く」という『歴史』の狙いに対応している。

ところで、『歴史』にはどのような革命的な行為が描かれるのだろうか。その一つは、陶一亭を中心とする工場防衛の闘いに関わる。陶は、接収に名を借りた権力者による紡績工場の私物化(保険金を目当てとして工場が放火される可能性も囁かれている)と日本への移転をも阻止すべく、工場を自力で防衛しようとする。そのため陶は、劉福昌ら仲間の協力を得て武器を調達することとなり、次節で述べるように竜田も銃弾の運搬を手伝うこととなる。ただし、自分の工場のみを防衛しようとする陶一亭と、他の工場の防衛も含んだより大規模な闘いを組織しようとする劉福昌や洪希生との間で意見の齟齬も存在する。このうち日本軍と国民政府によって破壊された総工会(労働組合)の組織の再建を企てていた劉は、混乱の中で殺害される。

また、周雪章とその父親にまつわる闘いも描かれる。周雪章の父は仁々薬房の経営者で元来は共產主義を毛嫌いし

ていたが、投機を目的とした葉の「買いだめ」に終始する商売のあり方に疑問を持ち、解放区で葉を販売することを検討する。そのため、父親は娘の雪章を通じて洪希生と面会するが、その場を押さえられて逮捕され殺害される（洪は逃亡する）。他方で、娘の雪章もK大学亜東問題研究会の活動を理由として別の場所で逮捕される。

さらに、これらの闘いとオーバーラップする形で、当局による露天商の弾圧に対する抵抗の動きが描かれる。この出来事の大枠は史実であり、堀田自身、上海においてこの「暴動」を経験した。堀田は芥川賞受賞祝賀会の「挨拶」において、その時のことを、「いはゞ革命前夜といった物騒極まる状態でした。政治の動揺、緊張民衆の不満、絶望と希望といふものが、どんな形を中国ではとるか、を少しは知つたように思いました」と回想している（『近代文学』一九五二年五月号、一四頁¹⁵）。なお、先述の『創作ノート（3）』には、*Newsweek*の一九四六年十二月一六日号から英文記事が全文抜粋されており、『歴史』執筆時堀田はこの記事を参考にしたものと思われる。まずは、この記事の内容を見てみたい。¹⁶

冒頭では、日中戦争勃発後、四百万の人口を持つ上海に徴兵を逃れて百万人の難民が流入したこと、彼ら彼女らが劣悪な生活を強いられることが紹介される。またその難民の多くは、「廉価な化粧品、ガラス製品から宝石やこっそり盗んだ米軍の配給品まで」ありとあらゆるものを行商して生計を立てていること、その低廉な価格が一般の商店を圧迫していることが指摘される。そうした背景の下で、一月後半に市が無許可の行商を禁止し、五百人の行商人を逮捕投獄したこと、その結果、生計の手段を奪われた家族が黄浦江の警察に押し寄せ二日間にあたる暴動を行ったこと、市長は戒厳令を発し警察に射殺命令を下したことが報じられる。一方で、この騒動で五十人が負傷したものの死者は出ておらず、すでに拘留された行商人のほぼ全てと暴動を扇動した疑いのある者二二一名中一三八名は釈放さ

れたと報じられる。

この露天商の弾圧に対する抵抗の動きは、『歴史』（全四部）の第二部以降において、一月三〇日と二月一日の二日間の出来事として描かれる。第二部の最終章「その前夜」には、「一九四六年十一月末日午後七時」、「同日 午後八時」、「同日 午後九時」、「同日 午後九時半」、「同日 午後十一時」、「十二月一日 午前零時」の小見出しが付されるほか、第三部でも随所で時間が示され、同時並行的に発生・進行する様々な出来事や様々な人物の行動が臨場感たつぷりに描かれる。¹⁷ 第二部最終章が「その前夜」とされるように、暴動の発生は二月一日とされている。第二部で描かれる暴動前日には、陶一亭と劉福昌は銃弾を米袋に入れて運搬し、洪希生、康沢、史量才も暴動の準備を始める。第三部、第四部では、暴動とそのただ中で発生する、江湾にある旧日本軍の弾薬集積所の断続的な爆発（理由は明らかにされない）、官憲による共産主義者の逮捕・処刑、ピラを用いた政府による民衆の扇動、民衆による略奪など、様々な出来事がカーニバル的な混乱を伴って描かれる。劉福昌の暗殺と周父娘の逮捕・殺害が生じるのも暴動当日であり、洪希生らは学生・教授・労働者らの釈放を求めて行動を起こすべく奔走する。

四 竜田

これまで論じてきたように、『歴史』の主な登場人物は、ほぼ支配層と革命家に二分される。日本人の竜田と亮子はこのいずれにも分類されないが、『歴史』の中で重要な位置を占める。本節では、まず竜田について検討したい。

国民政府に留用中の日本人インテリ竜田は、明らかに堀田の分身である。けれども、物語全体が堀田の分身である

木垣の視点に寄り添うようにして語られる『広場の孤独』のような作品と比べれば、『歴史』の場合、竜田は様々な登場人物のワン・ノブ・ゼムという印象が強い。『歴史』には竜田が登場しない場面も多く描かれるし、語り手は様々な人物の内面に自在に入り込む。

にもかかわらず、竜田は『歴史』の中で視点人物的な役割を果たしている。外国人の留用者であり、支配層のグループと革命家のグループの狭間に位置しつつその両方に関係する竜田の周縁的な立ち位置が、それを可能にする。読者は竜田を介して、内戦状態にある中国社会を二つのグループによって代表される階級間の対立として捉える俯瞰的な視点を手に入れる。

といっても、竜田は中国社会の状況を読者に対して表象する役割を帯びた単なる傍観者ではない。それどころか竜田は革命家たちとの交流を通じて、日本人インテリに特有の政治に対する傍観的な態度を深く反省するようになる。竜田はK大学の討論会における「あなた方日本の知識階級は天皇をどうしようと思っていますか」という質問や、政治的意見の異なる学生同士が徒党を組んで徹底的に口論する「なまなましくどぎつい姿」に大きな衝撃を受ける。そして、日本においては、「知識階級全体が、何等かの意味で監禁乃至軟禁状態、或は自己監禁、自己軟禁の状態にあつたのではないか」（第二卷一九頁）と反省する。また、康沢邸で学生たちが政治や革命について情熱的に議論する様子を見て、「革命どころか、政治或は政治的期待、希望が信じうるものとして信じられているらしいことの方が、奇蹟めいて見える」（第二卷三六頁）と彼我の違いを認識する。

その後竜田は、革命家たちの手助けをしたことをきっかけとして行動することに意味を見出していく。その経緯は次のようなものだ。竜田は、「ものを考えに野へ行った」帰りに銃弾の入った米袋を運ぶ劉福昌に偶然遭遇する。その

際、竜田は劉に乞われるままに自分の留用証明書を示し虚偽の説明をすることで検問所の通過を助ける。さらに、三つの米袋を翌朝まで預かることに同意し、大胆にもそれらをA A E Cの事務所のロッカーに運び込む。

米袋を運び終えた後、竜田は自分の行動の意味について長々と思いをめぐらす。そして、中国における革命が自分にとって他人事でないことに思い至る。それは劉福昌に会う直前に曠野で竜田が考えていたことと深く関わる。

『奴らはあれを繰返す』それは曠野の奥から夕日とともに鞭のように飛んで来て彼の額を撃った。奴らにとっては、すべてがまた始まるうとしているのだ。それだけのことなのだ、敗戦も勝利も降伏も、奴らにとっては本当のところ、大したことではないのだ。奴らはあれを繰返すほかには、どんな別の方途も考えることは出来ないのだ。空想力がないなどと云ってみてもはじまらない。奴らはもういちど、あの陶一亭の云った宿命のコースを繰返そうとしているのだ。早期復興のためと称して、過去の宿命的な産業構造を米国とともに再建しようとしているのだ。もういちど朝鮮へ押し渡り満洲へ雪崩れ込み、そして華北から華中へと、『奴らはあれを繰返す』竜田は草のなかに寝たまま眼を瞑った（第二巻八一頁、傍点堀田）。

右の引用文中にある「奴ら」とは左林らを、「あれ」とは中国侵略を指している。第二節で詳しく論じたとおり、戦後においても、左林らかつての日本軍の特務工作員は暗躍し続けており特務機関のネットワークも機能し続けている。また、右の引用が示唆するように、日本は戦前と同じ構造・体質を持った国家として再建されようとしている。作中では、産業の民主化を掲げる米軍の占領政策が転換されつつあることが示唆される。それゆえ、竜田には、いずれ日

本が中国侵略を繰り返すことは不可避と感じられる。しかも、左林と康正、羅紹良、李安耀が共謀関係にあるように、日本の元特務と中国の支配層は協力関係にある。「闘いながら商売をし、戦後は相携えて同一平面の再建にかかる」(第二卷一五二頁)腐敗した支配層は、他国による侵略も戦争も金儲けの機会として利用する。他方で、竜田は、「あれを繰返す」主体は元特務工作員のみでなく自分自身でもあることを自覚する。

ものの考え方感じ方をひっくりかえし生活を変え、極言して身体の生理的な構造までも考えねば、ひょっとしておれ自身があれをくりかえさぬとも限らない(第二卷一二三頁、傍点堀田)。

このような論理に基づいて、竜田は中国の革命運動に対するコミットと日本と中国の「宿命的な関係」の精算という課題を結びつける。またそのことによって、竜田はこれまで「外部の事件」、「偶然でありおれを巻き込むもの」として感じてきた戦争、敗戦、中国革命、弾圧などを、自身にとって「必然なもの」として捉え直す。さらに竜田は、「彼等から眺められている」ことを自覚することで「彼等」との間に連帯関係を見出していく。竜田は、自分にとって米袋を運ぶ行為は「偶然かつ無償に近い行為」であるにせよ、陶一亭や劉福昌にとっては「機能と責任」を伴う行為なのだと捉え直す。そして、「彼等」の視点に立ちながら、「彼等はそのいう行為者としての彼をそのとき、云うならば愛していた、かもしれない……」と推測する(第二卷一二七頁、傍点堀田)。『創作ノート(4)』(県立神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵)には、「時間をわがものにする、支配するとは、つまり生きるとは、彼自身が彼自身の行動によってその時間に意味を与えてゆくことであり、その意味がこの世の中で生きるためには、それは他の人々と

partager「共有——引用者注」¹⁹とれて engager「投企——引用者注」¹⁹とれてゐなければならない」という記述もある。

さて、その後も竜田は何度か中国人の仲間の手助けを行い（ビラ配りや連絡係など）、それらを自分なりの投企として意味づける。内戦下の中国において反政府陣営に味方することは大きな決断であり、たとえ些細な事柄であっても、それを行動に表すならば少なからぬリスクを伴う。実際、堀田が一九四六年末に急遽日本に帰国することを決めたのは、共產主義者であつたらしい知り合いの青年が逮捕され、その累が及ぶ危険を怖れてのことであつたらしい。¹⁹

とはいえ、竜田が行つた銃弾の保管、ビラ配りなどは、いずれも他者からの依頼に基づく受動的、補助的な行為であつたと言わざるを得ない。そもそも、中国人を主体とする運動の中で竜田の立場が部外者のそれだという印象は拭いきれない。といつても、竜田がそうした行為の意味を過大評価しているということではない。左林に対して帰国の意思を繰り返し表明する竜田は、中国における革命運動が自分の闘いでないことを十分に知っている。

五 亮子

実は作中には、竜田が「日本と中国」の宿命的な関係を清算する意味を持つ、より直接的な行動を夢想する場面がある。左林の殺害である。といつても、竜田にとってそれは、左林の背後から階段を下りる際に瞬間的に心をよぎつた非現実的な思ひつきであつたに過ぎない。だが、この行為は物語の末尾で萩原亮子によつて代行される。

亮子の本名は吉田初子であり、一八歳の時にT歌劇団に入団し一九四三年に前戦慰問のために中国に渡つた。やがて亮子は国民政府の捕虜となるが、羅紹良に見出されて重慶にある羅の私邸に預けられた。羅は亮子に中国語を教え、

軍や政界の要人を紹介し、羅白鯉^{ロバイリ}という名前で中国国籍を取得させる。羅は二重国籍を持ち二言語を操る亮子の特務機関の仕事やビジネスに利用するつもりであつたらしい。そしていよいよその時期が到来し、亮子は羅の秘書として上海に送り込まれる。上海到着後、亮子は李主任に竜田のホテルの一室に連れて行かれ、そのままそこに滞在することとなる。

しかしながら、亮子は個人的な体験から密かに特務機関を憎悪している。亮子は戦中の体験に関わる次の三つの記憶に囚われている。第一に、日俘管理所から羅の私邸に連れて行かれる途中で立ち寄った墓地の記憶。そこにはおびただしい数の日本兵が埋葬されていた。第二に、慰問団にいた頃、左林に漢口と上海でレイプされた記憶。左林は特務工作員が「文化人」を歓待する機会を利用し亮子に接近した。第三に、羅紹良邸で三虎牌マツチを目にした記憶。上海の日本軍管理工場で製造される三虎牌マツチが重慶の軍高官の家にあることは、日本と国民政府の間で対敵貿易が行われていることの証であつた。さらに、長らく日本から切り離され、「中国人で日本人」の立場におかれた亮子は、アイデンティティクライシスにも陥っている。

第三部において、羅紹良の秘書として左林に再会した亮子は激しく動揺し、左林の前で頑なに羅白鯉として振る舞う（もちろん、左林は亮子が日本人であることを知っている）。その直後、亮子は竜田の協力によりホテルを出て康沢邸に姿を隠す。この間の亮子の内面は意識の流れの手法で読者に示されるが、徐々に亮子は左林に対する復讐の念を募らせていく。

わたしは重慶の墓のなかから、復讐をしてやろうと思って出て来たのだから。復讐、仇うち。彼女ははじめて気

づいた。あの霧のうずまく重慶という墓のなかで、そうだ、復讐をこそわたしは考えて生きて来たのだ（第二卷二二七頁）。

いったい何の権威があればとて、中国とか日本とかいう、国家というものはわたしをおもちゃのように俘虜にしたり、日本人にしたり中国人にしたり出来るのだらう。奴らは国家なのだらうか、戦争も平和も、みんな自分たちのものだ、といったような顔をしている。彼女は無意識のうちに、左林、羅紹良、李安耀などが、戦争中のあれの雛形を、重慶で見たマツチに象徴されるような機関の、より大きな国際的規模にわたるものの芽を、この上海と東京でつくろうとしているのだ、と感じた。（略）あれを叩きこわさねば、わたしは（日本の日本人）たちのなかへ、静かに摩擦なしに入ってゆくことは出来ない……。 （略）——そこで彼女の考えは再び、マツチに、左林にぶつかり、またまた堂々めぐりである。あいつを取り除かないと、わたしは、いつまでも霧のなかのわたしだ……（第二卷二二七—二二八頁、傍点堀田）。

右の引用が示すように、亮子の復讐は左林からレイブされたことのみに関わるものではない。亮子が復讐しようとする相手は、左林個人というよりは左林に代表される権力の総体である。こうした亮子の思いは、戦後もかつての特務工員が暗躍し続ける状況を憂え、日本と中国の「宿命的な関係」を精算せねばならないと思ひ詰める竜田のそれと共鳴し合う。

物語の末尾において、亮子はA A E Cの事務所を訪れて左林に四発の銃弾を撃ち込む。竜田は亮子が、かつて自分

の頭をよぎった左林の暗殺を「直接やった」と認識し、「彼等」の助けを得て亮子を日本に逃亡させることを決意する。

こうなったからには、この女は彼等、にたのんで解放区へ逃がし、華北からでも日本へ返すほかに方法はなからう。今夜、彼等はどこにいる？ 彼等はどこかで、働いている。爆発音はまだつついている。彼等は果してひきうけてくれるだろうか？

彼等は恐らく孤独なテロリズムは許さない筈だが。しかし、おれはこの女を国民党の法廷へもアメリカの法廷へも日本の法廷にもわたしたくない、〈重慶の墓〉の下の死者たちが彼女を贖つめている。（第二卷二六六―二六七頁、傍点堀田）

他方で、竜田は、亮子が左林を撃った動機を次のように解釈する。

彼女にとって日本とは左林等のものであつてはならなかったのだ。（略）孤独な彼女はあはすることによつてしか、重慶の墓から抜け出し、日本人としての実在に達するすべを見出しえなかったのだ。恐らく彼女は左林という特定の男を撃つたのではない、彼女は或る象徴を撃つたのだ（第二卷二六七頁）。

右の引用にある「或る象徴」とは、先述したとおり、日本の中国侵略の元凶であった、特務工作員に代表される権力の総体を指す。そしてそれを象徴的に「撃つ」必要があつたのは、亮子や竜田のみではない。誰よりも堀田こそが

一年九ヶ月間の中国体験の総括として、中国侵略を反復しかねない日本の権力構造を否定する必要があった。先述の芥川賞受賞祝賀会の「挨拶」においても、堀田は、日本が中国侵略を繰り返す可能性を指摘し、「日本にとつて平和とはあくまでまたいかなる形でも中国を侵略しないこと、しないですむやうな工合に、一切の構造をつくりかへること、このほかにはないやうに、私には思へます」（『近代文学』一九五二年五月号、一四頁）と述べている。亮子による左林の銃撃は、ほかならぬ堀田が、敗戦を経て延命する大日本帝国に否を突きつけるパフォーマンスな行為にほかならなかった。

ただし、作中において銃撃による傷が致命傷とならなかった可能性を竜田が示唆していることは意味深長である。

あんな小さな拳銃では、たとえ四発全部が命中したとしても、致命傷を与えることはなかなかむずかしい（第二卷二六六頁）。

右は、堀田の立ち向かうべき相手の巨大さと、それに対する抵抗の微力さを意識していたが故の結末と解釈できよう。ところで、テロを起こす亮子にはアンドレ・マルロー『人間の条件』の陳大明が深い影を落としている。先述の『創作ノート（4）』には、「亮子」についての、「暗殺者となる。——Tchen de Malraux [マルローの陳——引用者注]』という記述がある。『人間の条件』は一九二七年の上海で発生した反共クーデターを扱った作品であり、決起した革命家たちがコミンテルンに見捨てられ国民党に虐殺される悲劇が描かれる。陳大明はこの作品に登場する革命家の一人であるが、テロリズムがはらむ死の美学に魅了される一匹狼的な人物である。陳は作品の冒頭で銃の仲買人を暗殺し、

さらにコミンテルンの方針に逆らって蒋介石暗殺を試みるが失敗して命を落とす。亮子は陳のようなヒロイズムに囚われているわけではないものの、左林の暗殺を決行する孤独な人物である点は陳に通じている。

ところで、亮子による左林の暗殺を共感を込めて描いているからといって、堀田はテロリズムを社会変革の手段として合理化しようとしているわけではない。むしろ、それが不可能であるからこそ、組織と接触を持たない孤独な人物に左林の暗殺を委ねる必要があったとも考えられる。亮子以上に『人間の条件』の陳に近い人物として造型されている史量才は、昆明で学生特務を暗殺した後に次のように考える。

革命家とは、決してテロリストの謂いではない、またあつてはならない筈である。革命は、ついにはテロリストを弾き出してしまうにいたる。またテロリストは必ず大衆から疎外する運命をもつ。世界は殺人を犯したことの無い者の所有すべきものであつて、殺人者の所有に属するものではないのであるから（第二卷一八二—一八三頁）。

また、だからこそ史は、殺人を犯したことを仲間に打ち明けることを控え、解放区に行くことを思い止まったのだと述懐する。こうした考え方は、小説『審判』の中で提示されている、死者が加害者を裁くという考え方に通じている。²⁰⁾

六 戦争の死者と「歴史」

前節で引用した亮子の語りには、「重慶の墓のなかから、復讐をしてやろうと思って出て来た」とする一節がある。また竜田が亮子を逃がすことを決意した後、「（重慶の墓）の下の死者たちが彼女を瞞つめている」と想像する場面もある。

両者の発言にある「重慶の墓」とは、前節で述べた通り、亮子が日俘管理所から羅紹良邸に移される途中で立ち寄った日本兵の墓のことであり、亮子はこの墓の記憶に深く囚われていた。『歴史』第二部第二章のタイトルは「重慶の墓」である。

亮子にとって重慶の墓とはどのような存在なのか。また、なぜ重慶の墓は亮子にとって「復讐」の基盤となり得るのか。これらの問いに対する答えは竜田の語りの中に示されている。

第二節で詳しく論じたとおり、竜田はラムステッドの示唆を受けて戦争の「osmotic」な作用、つまり「闘いながら商売をし、戦後は相携えて同一平面の再建にかかる」支配層の恥ずべき振る舞いに義憤を募らせる。

なにが中国人だ。なにが日本人だ。ふふふふ、ははは、はあはあはあ――耳の底に狂ったような笑い声が轟いた。ナンセンス――戦争も死も失業も貧窮も飢餓も、（同じ人間）のどんな苦しみもナンセンスだ。それは同一平面における経済と支配と操作の一齣二コマにすぎない。死んだ奴等はいったどこで死に、どこへ行ったのか、ふふ

ふふ、はははは、はあはあはあ——涙がぼとりと机の上に落ちた。戦争とは、何百万という人間が本意ならずして死んだ現実の事件ではなくて、ある経済上の必然的操作にすぎない……（第二卷一五二—一五三頁）。

右の引用文中において、竜田は「本意ならずして死んだ」多数の死者の存在を想起しているが、重慶の墓に埋葬される日本兵は、まさしくそのような死者である。⁽²⁾つまり、亮子による「復讐」とは、日中間の戦争に動員され無念に命を落とした死者に代わって、戦争のただ中で敵国と取引し私腹を肥やした権力者を撃つ行為にほかならない。

ところで、竜田は先述のラムステッドとの会話の後、死者が生者を駆り立てて歴史を動かす姿を夢想する。「*op. notice*」な作用による日本の産業構造の再編を見越しつつ「それが歴史というものだろう」と居直るラムステッドに対して、竜田は内心で異議を唱える。竜田は戦争の死者の存在を思い起こしつつ、ラムステッドが語る「歴史」に対して「もう一つの《歴史》の流れ」を対置する。そして、「生者が二六時中死者とともにあることは不可能である」として、死者が生者によって忘却される必然を認識しつつも、死者の怨念が「多数者」を動かす可能性について思いをめぐらせる。というのも、権力から疎外され、時代に翻弄される「多数者」は死者のすぐ近くに位置しているからだ。

しかし考えて見れば、機械仕掛けの運命に負われ放しの、数えることも出来ず、とりつく島もないほどの多数の人々は、つねにこの死者の世界と膚接して生きている筈であり、死者の世界に陥らされることについても、その距離は最も短い筈である。とすれば真に歴史を動かす潜在エネルギーもまた、運命に対して最も力弱い筈の多数者に於て最も強力な筈である。強力でなければならぬ筈である（第二卷七六頁）。

ところで、本書のタイトルは「歴史」である。「歴史」は小説のタイトルとしては奇異な言葉であるが、堀田は『歴史』において、他でもない「歴史」そのものを描こうとしたのだと考えられる。そして堀田が描こうとした「歴史」とは、何よりも中国における階級闘争を通じて革命の過程であった。その主体は被抑圧者階級であり、また彼ら彼女らの意思を汲んで革命を志向し連帯する多様な人々でもあった。ここで、堀田が「群衆そのものを描く」ことを『歴史』の狙いとし、革命を志向する主要な登場人物のほかに、名もなき民衆の姿をも描いていたことを思い起こしておきたい。彼ら彼女らは「流氓」とも名指され、その多くは闇取引によつて糊口を凌ぐ人々である。テキストの中でくり返し言及される抗日戦争後に上海に流入した百万人の避難民の多くも「流氓」の中に含まれる。堀田は『歴史』において、そうした無数の人々が、決断と行動を通じて歴史に参加する様を描こうとしたのだと考えられる。単行本『歴史』の帯には、次のような堀田の言葉が書かれていた。

『歴史』は小説であろうか——現在の諸条件のなかで、人は如何にして実在性を獲得し、自己の孤独な時間の質を変え、これを歴史的時間のなかに位置せしめ得るか——不安の障壁、呪縛から抜け出るために、これは一つのエッセイ、試みである。⁽²²⁾

右のような歴史の捉え方はマルクス主義的とも言えようが、戦争の死者の怨念が多数者を駆り立てるといふ発想は、戦後派らしい考え方であると言える。たとえば、戦後派の旗手であった埴谷雄高の評論「平和投票」(『群像』一九五一年六月号)には、「死者はつねに見捨てられた歴史の彼方で、生者を呼んでいるのです」という一節がある。⁽²³⁾また埴

谷は、評論「戦後文学の党派性、補足」（『群像』一九七四年三月号）において、「革命運動を振り返っても、戦争をふりむいても、死者はつねに私達の傍らに寄り添っていたのであり、そして、戦後文学のリアリティこそはその死者に支えられていたのである」として、戦後文学のリアリティの基盤を革命や戦争の死者に見出している。²³

堀田においても、多くの死者を生んだ戦争体験は文学活動の原点であった。堀田の場合、その中心にあったのは上海で日本の中国侵略の現実を目の当たりにした体験である。また、戦後の国民政府に対する徴用は、政治の中枢に居座る者と政治に翻弄される末端の者との間にある深い溝に目を向けさせた。『歴史』には、こうした体験がストレートに反映されていると考えられる。

おわりに

本稿で詳しく論じたように、『歴史』は中国の内戦を正面から描いた極めてスケールの大きな作品であった。『歴史』において、堀田は中国の内戦の背景にあつた階級間の対立に着目し、胎動しつつあつた革命の動きに深いシンパシーを寄せた。視点人物的な位置にある日本人インテリ竜田は、中国人の革命家に連帯感を抱き、日本と中国の「宿命的な関係」の清算のため行動を模索する。また竜田と思いを共有する亮子は、延命する大日本帝国の象徴である左林に対する復讐を果たす。

『歴史』は「上海もの」の集大成といわれる作品であり、「祖国喪失」、「歯車」、「断層」などと多くの接点を持つ。一方で、『歴史』は中国の内戦をマルクス主義的な視点から描き、革命派に対するシンパシーをストレートに表明した、

やや特異な作品でもある。堀田はデビュー当初から乱世を生きるインテリをくり返し描いてきた。彼らの多くは、乱世的状況を追認する宿命論的な考え方に批判を持ちつつも、政治的なコミットメントに対しても懐疑を抱く。たとえば、朝鮮戦争期の日本を舞台とした芥川受賞作「広場の孤独」の視点人物であるインテリ木垣は社会のいたる所に影を落とす冷戦構造を批判的に見据えながらも、政治的な次元の行動に踏み出すことはない。同僚の共産党員御国に対する態度も冷淡である。ただし木垣は、物語の末尾で、状況に対する抵抗の意思を込めて小説を書き始める⁽²⁵⁾。

『歴史』発表後に執筆された作品についても、こうした方向性は基本的に踏襲されている。南京大虐殺を中国人の視点から描いた『時間』においてさえ、主人公のインテリ陳英諦は行動的な人物とは言えない。陳英諦は日本軍に対する抵抗の意思を抱き、国民政府のために密かにスパイ活動を行いつつも、行動的な共産党員の刃物屋と自身の姿勢を差異化する⁽²⁶⁾。さらに長編小説『海鳴りの底から』では、島原の乱に参加しながら裏切り者となる実在の画家山田右衛門作が主人公に据えられる。右衛門作は、一揆から離脱して一揆の事実を伝えることに画家である自らの役割を見出す⁽²⁷⁾。また堀田は、七〇年代初めから晩年に至るまで、乱世を生きる実在の作家・芸術家の評伝を描く仕事に熱中した。堀田が取り上げた鴨長明、藤原定家、ゴヤ、モンテーニユらは、いずれも行動的な人物ではなく、彼らの反時代的な精神と抵抗の意思は作品を書く／描くことに向けられる⁽²⁸⁾。

ところで堀田は、『歴史』発表後も日本の中国侵略の責任についてたびたび言及し、その観点から日中間の国交回復の必要をくり返し主張した。他方で、左派の知識人が革命後の中国を理想化し絶賛する時状況の中で、堀田の共産主義中国に対する讃辞は控えめであった。堀田の個人主義的な気質と文学的な感性が、体制思想となった中国の共産主義について一定の距離をとらせたように思われる。同時代の中国を概ね好意的に描いている『上海にて』においても、

「冒険家の楽園」や「魯迅の墓」などの章では、共產主義体制に対する違和感が微妙な言葉で表現されている。さらにこうした傾向は、中国による核の保有や中ソ対立の深刻化によって、いっそう強められた。⁽³⁰⁾ただし、ここから読み取るべきは反共イデオロギーなどではなく、政治や国家をめぐる堀田の一貫して懐疑的な姿勢である。そしてそれは、『歴史』において、政治から置き去りにされた戦争の死者に自己を重ね、その立場から中国の革命派にシンパシーを示した竜田の（即ち堀田の）姿勢と決して矛盾するものではない。

*本稿では、神奈川近代文学館堀田善衛文庫に所蔵されている未公開資料を紹介・引用させていただきました。資料の公開をご快諾いただきました堀田善衛氏の著作権継承者である堀田百合子様のご厚意に深く感謝いたします。また、資料の閲覧および公開について、神奈川近代文学館の職員の皆様に大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

- (1) 初出は、「序章」（原題「歴史」）『別冊文芸春秋』一九五二年二月号、「石を愛する男」『文学界』第二十六号、一九五二年五月、「無人地帯」^{ノ・マンズ・ランド}『新潮』一九五二年四月号、「不幸への意志」『文芸』一九五二年七月号、「零点運動」『別冊文芸春秋』第三〇号、一九五二年一〇月、「重慶の墓」『文芸』一九五二年一二月号、「週行的」（原題「危険な物質」）『文学界』一九五三年三月号、以下書き下ろし。なお、本稿における堀田の著作からの引用は、原則として『堀田善衛全集』（第二期）全一六巻（筑摩書房、一九九三―一九九四年）に依拠する。引用する際は、本文中に巻数・頁数を記載する。

- (2) 「上海の、作家、並びに学生諸君、私は今日、ここで話をする機会を得たことを心から嬉しく思います」という一文で始まる「日本の知識份子」は、一九五七年に上海で行った講演の原稿であるようだ。タイトルの右側には、鉛筆書きで「一九五八年 中国」とい

う表記があるが（本文は万年筆で書かれている）、「一九五七年 中国」の間違いであろう。

- (3) 初出は、「波の下」『個性』一九四八年二月号、「共犯者」『個性』一九四九年五月・六月合併号、「彷徨える猶太人」『人間』一九五〇年五月号、「祖国喪失」『群像』一九五〇年五月号、「非革命者」『改造文芸』一九五〇年一月号。創作集『祖国喪失』（文藝春秋、一九五二年）収録時に、以上の五編は「祖国喪失」というタイトルの一つの作品にまとめられた。

- (4) 中国の内戦に（こゝへ）Pepper Suzanne, *Civil War in China: the Political Struggle, 1945-1949*, University of California Press, 1978, Westad, Odd Arne, *Decisive Encounters: the Chinese Civil War, 1946-1950*, Stanford University Press, 2003 など参照。なお堀田は、『歴史』を執筆する上で、アメリカ国務省『中国白書』（朝日新聞社、一九四九年）を「一番参考にした」と述べている。「私の創作体験」『乱世の文学者』未来社、一九五八年。

- (5) 佐々木基一「堀田善衛論」『現代日本文学大系』第八七巻「堀田善衛・遠藤周作・井上光晴」は、明確な「位置選択」を行っている点において、『歴史』に「広場の孤独」からの飛躍を見出している。矢崎彰「堀田善衛——上海から被占領下の日本へ」『文学』第四巻第五号、二〇〇三年九月は、政治に対する「積極的な姿勢」を描いている点に『歴史』の特異性を認め、その背景に日本の侵略戦争の死者に対する思いがあることを指摘している。

- (6) ナチスとアメリカ企業の関係については、チャールズ・ハイアム『国際金融同盟——ナチスとアメリカ企業の陰謀』（青木洋一訳、マルジュ社、二〇〇二年）を参照。

- (7) 作中では、「osmotic」の意味は、「交流とか滲透とかいう意味の化学用語」であると説明されている。

- (8) 陳童君が「堀田善衛の敗戦後文学論——『中国』表象と戦後日本」（鼎書房、二〇一七年）第七章第二節で指摘しているように、『歴史』は茅盾『子夜』から大きな影響を受けて書かれている。『子夜』は、内戦の混乱の下にあった一九三〇年の上海を舞台として、呉荪甫に代表される産業資本（民族資本）が投機的資本、金融資本に敗北する物語として捉えることができる。こうした中国の半植民地的な経済構造への着目と「全体的な社会小説の志向」とが、『歴史』に多くの示唆を与えたと考えられる。なお堀田は、竹内好訳の『子夜』（現代中国文学二 茅盾）河出書房新社、一九七〇年）の巻末に、「回想・作家茅盾」というエッセイを執筆している。

- (9) アンラについては、板垣興一編『アメリカの対外援助——歴史・理論・政策』（佐藤和男訳、日本経済新聞社、一九六〇年）第一部第二節に詳しい記述がある（同書では、「アンラ」に「連合国救済復興機関」の訳語が当てられている）。同書では、中国、ギリシャ、

堀田善衛『歴史』

ポランドにおいて、相当量のアンラ物資が闇市場に流れたことが指摘されている。

- (10) 昭和通商については、山本常雄『阿片と大砲——陸軍昭和通商の七年』（PMC出版、一九八五年）を参照。
- (11) 児玉誉士夫については、有馬哲夫『児玉誉士夫——巨魁の昭和史』（文藝春秋、二〇一三年）などを参照。
- (12) 里見機関については、佐野真一『阿片王——満州の夜と霧』（新潮社、二〇〇五年）などを参照。日本の阿片取引については、江口圭一『日中アヘン戦争』（岩波書店、一九八八年）などを参照。
- (13) 『時間』については、拙稿「堀田善衛『時間』——乱世を描く試み」『北海道大学文学研究科紀要』第一五四号、二〇一八年三月を参照。
- (14) 注4で挙げたPepper Suzanne, *Civil War in China's Westad, Odd Arne, *Decisive Encounters**は、いずれも、内戦の初期の段階（米国が調停を放棄する一九四七年初めまで）の反政府運動において重要な役割を果たした学生運動が、国民党の主張に反して、必ずしも共産党の影響下にあったわけではなく、また中国の共産主義化を求めていたわけでもなかったとする見解を示している。
- (15) 紅野謙介編『堀田善衛 上海日記——滬上天下 一九四五』（集英社、二〇〇八年）に収録されている日記（一九四六年一月二九日分が最後である）には、この「暴動」についての言及はない。
- (16) "China Peddler's Revolt", *Newsweek*, December 16th, 1946.
- (17) これらの点には、マルロー『人間の条件』からのあからさまな影響が見て取れる。この点については、前掲陳童君『堀田善衛の敗戦後文学論』第七章第三節参照。
- (18) 『広場の孤独』については、拙稿「堀田善衛『広場の孤独』論——二〇世紀における政治と知識人」『層——映像と表現』第九号、二〇一六年一〇月参照。
- (19) 『わが文学、わが昭和史』筑摩書房、一九七三年、一五九頁。
- (20) 拙稿「堀田善衛『審判』論——原爆投下の罪と裁き」『北海道大学文学研究科紀要』第一四三号、二〇一四年七月。
- (21) 竜田は、自分を「彼等」（中国人の革命家たち）に「結びつけるもの」が、「実はまだ乾ききったとは云えぬ彼の同年代の日本人と中国人の戦死者の血にまみれた或るものである」とも述べている（第二卷一八九頁、傍点堀田）。
- (22) 栗原幸夫「解題」『堀田善衛全集』（第一期）第二卷、一九七四年、筑摩書房、四一七頁。

- (23) 『埴谷雄高全集』 第一巻、講談社、一九九八年、三八五頁。
- (24) 『埴谷雄高全集』 第九巻、講談社、一九九九年、一七一頁。
- (25) 前掲拙稿「堀田善衛『広場の孤独』論」。
- (26) 前掲拙稿「堀田善衛『時間』——乱世を描く試み」。
- (27) 拙稿「ユダとしての知識人——堀田善衛『海鳴りの底から』論」『北海道大学文学研究科紀要』 第一四八号、二〇一六年三月。
- (28) 拙稿「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(1)——西行」『北海道大学文学研究科紀要』 第一五〇号、二〇一六年十一月、拙稿「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(2)——鴨長明・藤原定家」同、第一五一号、二〇一七年二月、拙稿「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(3)——ゴヤ」同、第一五二号、二〇一七年七月、拙稿「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(4)——モンテ・ニユ」同、第一五三号、二〇一七年十一月。
- (29) 戦後日本の知識人の中国像については、馬場公彦『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』(新曜社、二〇一〇年)を参照。
- (30) 拙稿「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議(2)——政治と文学」『北海道大学文学研究科紀要』 第一四七号、二〇一五年十一月。